

国際競争に対応する製糸技術のあり方

——製糸技術から見た対応策（要旨）——

日本製糸協会 工務部長 吉 村 公 明

1. 現状と問題点

近年、わが国への外国産生糸・絹織物等の流入が急速に進み、いまや国内市場において、見逃すことの出来ない大きな影響力を持つに至っている。

このような国際環境の変化に対応するためには、もとより技術面だけで処理できるものではなく、広く内外両面に亘っての問題分析が必要であるが、製糸業の場合には、とりわけ景気変動に伴う問題点が多いことにも考慮を払う必要がある。

なお、いかなる技術的対応も、最終的には、個別企業内部における経営活動の一環として機能するものであるから、問題の範囲は、単に国際的生糸需給構造の変化に対する対応策の検討に留まらず、むしろ、産業環境・経営環境そのものの変化、すなわち一般的な社会事情の変化に伴う国内市場の変容そのものに対する対処方策の策定が基本命題となる。

2. 技術面から見た対応策

対応策は、大別して、絹産業全体としての対応策・製糸業グループとしての対応策・地域別グループとしての対応策等、群としての対応策と、他方、これらとの有機的な関連において講ぜられるべき個別企業における対応策とに分れる。

前者については、それぞれの群としての対応技術を、総合的・斉合的に最も効果的なシステムとして組み立てると共に、そのシステムが期待通りに機能しているかどうかを絶えず監視・善導することが必要となる。

また、後者については、日常の企業活動の中で、現在用いられている設備・技術の改善あるいは新しい設備・技術の導入を行うと共に、改善された技術水準の定着・維持・向上を継続的に保証することが必要となる。

両者は一見相反する特質を持っているが、いずれの場合も経営管理に関する既存の手法を活用して処理することができる。

3. 今後の課題と考え方

わが国の蚕糸絹業が存続発展するための基本要件は、いうまでもなく絹需要の確保推進にある。

したがって、今後の課題としては、われわれのシルク・マーケットを安定性のある需給構造を持つ固有の市場として定着化する方策を、関係者の一致協力によって、早急に策定することが挙げられる。

また、一方、技術面においては、経営の実態に即しつつ、既存技術の改良改善を図ると共に、これと併行して、長期的展望の下に、人工飼料の活用・高性能製糸機械の開発・生糸供給方式の改善・新規用途の開拓等につき、メーカーおよびユーザーの両面から考慮しながら、新しい技

術体系の開発と経営の対応を進めて行くことが肝要である。

さらに業界全体としての基本対策としては、国際的視野に立っての流通の調整と、国際規模における絹需要の振興方策が必要であることは、いうまでもない。